

V 研究活動—資料報告・研究ノート等—

1 佐渡近海発見の弥生土器

新潟市の井村洋氏が発見した弥生土器について資料紹介を行う。

経緯 平成26年10月12日（日）、新潟漁業協同組合新潟支所より、井村氏が土器を引き揚げたとの連絡が文化財センターにあった。10月15日（水）、同組合で発見の経緯を伺うとともに、資料を実見し、重要な資料であることから、資料を借用し、実測図や写真等の記録をとり資料紹介させていただくこと、併せて文化財センターで展示させていただくことについて了解いただいた。

この資料は、平成26年10月10日（金）、小型底引き網漁を行っている際に引き揚げたもので、引き揚げ地点は佐渡市水津から南東に7マイル（12.96km）の「赤玉」と呼ばれる漁場である。水深は約130m、北緯37度58.9分、東経138度41.3分（日本測地系）で、引き揚げ地点の脇には沈船（通称「アテ」：網が当たって引っかかる所）があり、良好な漁場になっているという。

遺物（図1・78頁写真）内外面にゴカイが多く付着し、口縁部が一部欠けるほか、引き揚げ時の衝撃で底部が割れているものの、接合するとほぼ完形に復元可能である。器形は口縁部が短く外反し、球形の体部が特徴的な壺である。色調は淡橙色から黒褐色で、口径

13.7cm、底径9.5cm、器高28.0cm、最大径28.7cmを測る。口縁部は無文で横位のヘラナデ。体部は大粒のLR縄文を施文するが、下半はヘラ状工具で荒くナデ調整し無文としている。底部には網代痕がある。内面は調整が荒く、体部上半は輪積み痕や指頭痕などのナデ、下半はヘラナデである。胎土に2～5mmの長石・石英等の砂粒を多く含み、信濃川中下流域あるいは阿賀野川流域に一般的な胎土と考えられる。焼成は良好で、遺存状況も磨減・磨耗等がほとんど見られない。体部下半内外面にススや炭化物が付着している。器形・文様整等の特徴から、この土器は弥生時代前期末から中期初頭の所産と考えられる。佐渡では当該期の遺跡が明確ではなく、胎土の特徴からも越後本土から運ばれたものと考えられる。東日本の当該期には再埋葬といわれる墓跡が大半で集落跡は少ない。再埋葬から発見されるような煮沸痕のある大形壺が再埋葬以外から発見されたことの意義は大きい。

まとめ 新潟県海揚がり陶磁器研究会の集成によると、県内の海揚がり資料は、古代23点・中世113点と古代・中世の遺物が大半である〔寺崎ほか2014〕。古墳時代以前の海揚がり資料は、縄文土器2点・石器1点、弥生土器2点・石器1点、古式土師器2点と極めて少ない。弥生土器はいずれも後期の資料であり、前期・中期の資料は報告されていない。本資料は再埋葬以外で発見された当該期の極めて貴重な資料である。

新潟県内における当該期の代表的な遺跡の一つである緒立遺跡には青森県の砂沢式や山形県の生石2式に類似するものがあり、弥生時代以降活発になる日本海交流の状況を示している。本資料はこれまで漠然としていた日本海交流が陸路だけではなく、海路もあったことを証明する格好の資料になると言えよう。

遺物の時期等について明治大学石川日出志氏にご教示を得た。

（渡邊朋和）

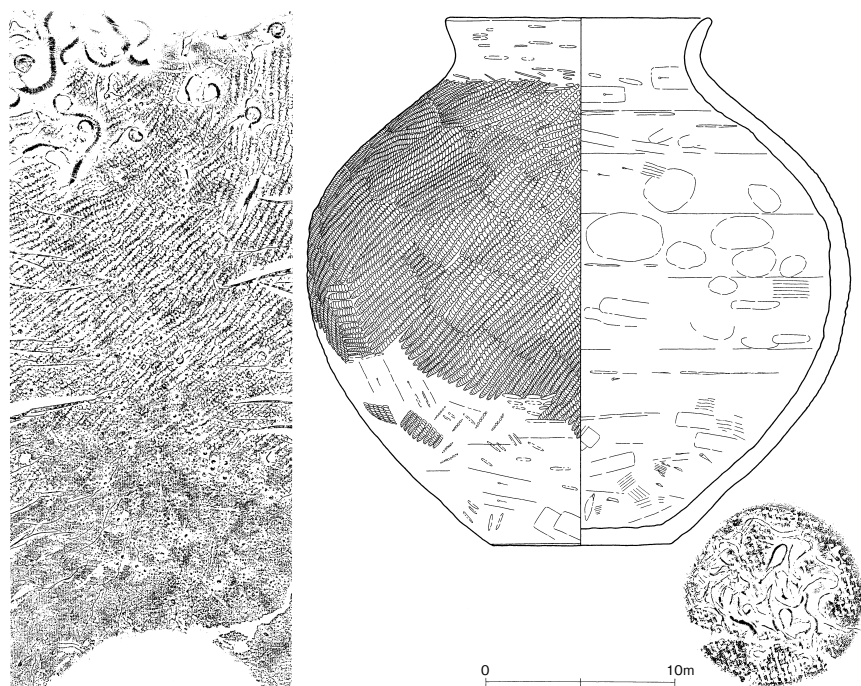


図1 遺物実測図（1/4）